善意と義務

苫小牧市立ウトナイ中学校　三年　亀井　柚希

「募金」という言葉にどんなイメージを持つだろうか。「協力したい」「払いたい」という人が多いと思う。

私もその一人だ。よくレジの横に置いてある募金箱を見かけることがある。幼い頃の私はその募金箱を見つけると母におつりの小銭をせびってよく募金をしていた。そこにはただ純粋に人の役に立つことをしたいという気持ちがあっただけだったと思う。

身近にあり、目に見える形で誰かのためになることを感じられる「募金」という手段に共感してお金を投じたのだと思う。この感覚こそ多くの人が募金に「協力したい」と思う根本なのだと思う。

対して「税金」と聞くとどうだろうか。あまり「払いたい」という人は多くないのではないだろうか。ニュースでも税金を滞納して…という言葉をよく耳にする。でもそう思うのは、使われ方があまり理解できていなかったり、身近に感じにくかったりするからだと思う。

例えば年金。税金の使いみちで一番多く使われる社会保障の一つだ。六十五歳以上になると二か月に一回支給される年金は老齢基礎年金という。私の祖父もこのお金をもらっている。長年働いて定年退職した祖父の生活はこの年金という制度に大きく支えられている。この老齢基礎年金の他にも年金には二つ制度があることを今回調べてみて分かった。

一つは、病気やけがが原因で障害がのこってしまったときにその程度によってもらえるお金。

もう一つは、一家の生計を支えている人に万が一のことが起こったときにもらえるお金だ。どれも受けとることができる人に条件はあるけれど、困っている国民によりそった制度だと思った。年金という制度一つをとってもいろいろな種類があって、中学生の私にも関係してくるものなのではないかと感じた。

最初にいった「募金」は人の善意から支え合いのしくみが成り立っているが、「税金」は義務から支え合いのしくみが成り立っている。でもたとえ義務だとしてもこの年金のように困っている人を支えるお金になりうるのだ。

善意と義務という違いがあったとしても、根本的な「支え合い」という気持ちは同じであると私は思う。私自身学生で、まだ働くことはできないが、将来働いたときには募金と同じように人の役に立てることをするという気持ちを持って税金を払っていきたい。